

宮澤賢治

GENJI
MIYAZAWA

現代日本文学アルバム
JAPANESE MODERN LITERATURE IN PHOTOS

10

現代日本文学アルバム 10
73482

宮澤賢治

監修委員

川端康成

井上 靖

編集委員

足立卷一

奥野健男

尾崎秀樹

北 杜夫

学習研究社

現代日本文学アルバム

第10巻

宮澤賢治

昭和49年 8月30日 初版発行



発行人 古岡秀人

編集責任者 桜田 満

発行所 株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台4丁目40番5号

郵便番号 145 振替 東京142930

電話 東京(03) 720-1111(大代表)

印刷・製本 図書印刷株式会社

製函 永井紙器印刷株式会社

本文用紙 三菱製紙株式会社

表紙 特種製紙株式会社

*この本に関するお問合せやミスなどがありましたら、
文書は、東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145)
学研 ユーザー・サービス部
現代日本文学アルバム係へ
電話は、東京(03) 720-1111または
東京(03) 727-1600へお願いします。

©1974 Printed in Japan

目次 KENJI MIYAZAWA

目次

宮澤賢治文学へのいざない……………	5
-------------------	---

宮澤賢治文学紀行／奥六郡の中の賢治……………	島尾 敏雄	69
------------------------	-------	----

宮澤賢治文学旅行ガイド……………	涌田 佑	101
------------------	------	-----

宮澤賢治の素顔……………	117
--------------	-----

宮澤賢治とその時代	真壁 仁
.....	185

宮澤賢治主要作品鑑賞小辞典	天澤退二郎
.....	217

年譜	堀尾 青史
.....	233

著作目録	堀尾 青史
.....	242

主要参考文献	堀尾 青史
.....	243

資料提供
赤石俊一
石川玲児
菊池武志
草野心平
佐藤隆房
沢里武治
白藤慈秀
鈴木実
高橋昭
高村君江
辻一
照井謹二郎
中村亀男
堀尾青史
真壁仁
松田稔
宮澤卯三郎
宮澤史郎

宮澤清六
森莊己池
山崎善次郎
山室民子

朝日新聞社
岩手大学
岩手日報社
救世軍
共同通信社
国会図書館
農林省東北農業試験場
日本近代文学館
花巻小学校
毎日新聞社
盛岡第一高等学校
読売新聞社
(五十音順敬称略)

編集スタッフ
編集責任
桜田満
編集担当
勝呂睦男
校正
須山康邦

写真
成田牧雄

地図製作
玉木図版社

装幀 大川泰央

レイアウト 大川泰央

宮澤賢治文学へのいざない



初冬の小岩井農場

春と修羅



岩手山の東麓に位置する鞍掛山



くらかけの雪

たよりになるのは
くらかけつづきの雪ばかり
野はらはやしも
ぼしやぼしやしたり黙んだりして
すこしもあてにならないので
ほんたうにそんな酔母のふうの
朧ろなふぶきですけれども
ほのかなのぞみを送るのは
くらかけ山の雪ばかり

(ひとつの古風な信仰です)

いまやそこらはalcohol瓶のなかのけしき
白い輝雲のあちこちが切れて
あの永久の海蒼がのぞきでてる
それから新鮮なそらの海鼠の匂
ところがおれはあんまりステッキをふりすぎた
こんなにはかに木がなくなつて
眩しい芝生がいつぱいいつぱいにひらけるのは
さうとも 銀杏並樹なら
もう二哩もうしろになり
野の緑青の縞のなかで
あさの練兵をやつてゐる
うらうら湧きあがる味爽のよろこび
氷ひばりも啼いてゐる
そのすきとほつたきれいななみは
そらのぜんたいにさへ
かなりの影きやうをあたへるのだ

(「真空溶媒」より)





▲冬の小岩井農場より見た岩手山

日輪青くかげろへば

修羅は樹林に交響し

陥りくらむ天の腕から

黒い木の群落が延び

その枝はかなしくしげり

すべて二重の風景を

喪神の森の梢から

ひらめいてとびたつからす

(気層いよいよすみわたり

ひのきもしんと天に立つころ)

草地の黄金をすぎてくるもの

ことなくひとのかたちのもの

けらをまとひおれを見るその農夫

ほんたうにおれが見えるのか

まばゆい気圏の海のそこに

(かなしみは青々ふかく)

ZYPRESSEN しづかにゆすれ

鳥はまた青ぞらを截る

(「春と修羅」より)

わたくしはあるいて馬と並ぶ

これはあるひは客馬車だ

どうも農場のらしくない

わたくしにも乗れといへばいい

馭者がよこから呼べばいい

乗らなくたっていいのだが

これから五里もあるくのだし

くらかけ山の下あたりで

ゆつくり時間もほしいのだ

あすこなら空気もひどく明瞭で

樹でも艸でもみんな幻燈だ

(「小岩井農場」より)

冬にきたときとはまるでべつだ
みんなすつかり変つてゐる
変つたとはいへそれは雪が住き
雲が展^{ひら}げてつちが呼吸し
幹や芽のなかに燐光や樹液^{じゆりき}がながれ
あをじろい春になつただけだ
それよりもこんなせわしい心象の明滅をつらね
すみやかなすみやかな万法^{ばんぽう}流^{りゅう}転^{てん}のなかに
小岩井のきれいな野はらや牧場の標本が
いかにも確かに継^{つぎ}起^{おこ}するといふことが
どんなに新鮮な奇蹟^{きせき}だらう
ほんたうにこのみちをこの前行くときは
空気がひどく稠密^{ちうみつ}で
つめたくそしてあかる過ぎた

（「小岩井農場」より）







巨雲が走る小岩井農場

青らむ天のうつろのなかへ
かたなのやうにつきすみ
すべて水いろの哀愁を焼き
さびしい反照の偏光を截れ
いま日を横ぎる黒雲は
侏羅や白堊のまつくらな森林のなか
爬虫がけはしく菌を鳴らして飛ぶ
その氾濫の水けむりからのぼつたのだ
たれも見えてゐないその地質時代の林の底を
水は濁つてどんどんながれた
いまこそおれはさびしくない
たつたひとりで生きて行く

〔小岩井農場〕より〕

木立がいつか並樹になつた
この設計は飾絵式だ

けれども偶然だからしかたない
荷馬車がたしか三台とまつてゐる
生な松の丸太がいつばいにつまれ
陽がいつかこつそりおりてきて
あたらしいテレピン油の蒸気圧
一台だけがあるいてゐる

けれどもこれは樹や枝のかげでなくて
しめつた黒い腐植質と
石竹いろの花のかげら
さくらの並樹になつたのだ
こんなしづかなめまぐるしさ

〔小岩井農場〕より〕



早春のやわらかい
陽差しを受ける小
岩井農場のサイロ

